

33カ国リレー通信



ブラジル連邦共和国

República Federativa do Brasil

ノルデスチ（ブラジル北東部）農業についての三つのメモ ーサトウキビの低迷と灌漑農業の躍進ー

岸和田 仁

『農民同盟』発祥の地ガリレイア農場を訪ねて

かつて、『農民同盟』と呼ばれた、激しい農民闘争があった。

そのリーダーは、自著（『重いくびきの下で』岩波新書、1976年）において、こう要約している。

「農民同盟は急速に成長した。それは乾ききった燎原の火のように燃え上がり、とりわけキューバから吹いてきた強風によって、急速に燃え広がった。この草原は、ポルトガルの植民者によって準備された。植民者の後裔は、奴隷廃止やウジーナ（近代的製糖工場）による古いエンジェーニョ（砂糖搾汁場）の代替の後の一時的蹉跌からたちまち蘇って、封建的借地関係におかれた奴僕や、エイテイロとかコンデイセイロといった農業労働者を牛馬のように働かせて存続続けた。そして、この奴僕や農業労働者は、奴隷そのものよりももっとひどい状態にあった。」（同書、108頁）

1955年に開始された、この先駆的な農民運動はペルナンブーコ州内に限定せず隣のパラíba州やリオグランデ・ド・ノルチ州にも広がり、ミナスジェライス州などの南部でも共鳴する運動が連鎖反応的に拡大していったのであったが、1964年4月に成立した軍事政

権によって弾圧されてしまう。リーダーのフランシスコ・ジュリアン（1915 - 1999）はメキシコに亡命することになる。今から50年前のことだ。

49年後の2013年4月1日、「フランシスコ・ジュリアン農民同盟記念メモリアル」を建設するための記念礎石が、「メモリー・真実・正義のためのペルナンブーコ州委員会」によってガリレイアの地に築かれた。この定礎式で式辞を述べたのが、人類学者アナクレト・ジュリアンであった。フランシスコ・ジュリアンの長男である。

それから数日後、筆者もこの地を訪ねてみた。レシーフェから55kmほど内陸のところに位置するヴィトリア・デ・サント・アンタウン市の一地区だが、ガリレイアにたどり着くまでにはいささか骨が折れた。ネット検索にも引っかけられず道路案内版もないので、何人もの人に尋ねて、なんとかガリレイアへの入口に到着、そこから、勾配の急なドロ道を4kmほど行ったところが、かつての「ガリレイア農場」だ。

小高い丘となったところに、ミニサッカー場が設けられており、小道を挟んでその反対側に、高さ2メートルほどの、コンクリート製の記念銘板が屋根付きで建てられ

ていた。銘板に書かれた文字を一字一字追っていくと、「1955年1月1日、『ペルナンブーコ農業牧畜従事者協会、農民同盟』が、この地で生まれた」とある。

この農民協会の目的は、組合員の子弟のための学校にきてもらう教師の雇用基金設立、種子や肥料・農機具などの購入融資組合設立といった実に穏健なものであったが、この組合運動が進む過程で農地改革から体制改革まで求める運動に転化していくのである。

そんな過去の歴史を住民の方に聞くべく、記念銘板が設置されたすぐ横のお宅を訪ねてみた。まったく突然の訪問であったにも拘わらず、アルナルド・アウグスト・アルヴェスさんは、嫌な顔もせず、淡々と“自分史”を語ってくれた。

彼は1942年生まれだから、同盟が出来た1955年はまだ13歳だった。積極的に参加するようになったのは、1960年代前半からだ。

「闘争の日々だったね。沢山の闘いがあり、今から思うと信じられないような危険を感じたこともあったね。警察隊が近付いてきたため、農民仲間と一緒に山の中にこもって野宿したこともあったし。もう随分昔のことだね。シド・サンパイオが州知事の時、ガリレイア農場の解体、モラドール（隷農

的小作人)への土地分割譲渡が決まったんだ。

今では、皆、シチアンテ(自作小農)となって、各自が選択した農作物を植えている。昔からのサトウキビを続けているのは少数派で、トウモロコシ、マンジオッカ、野菜・香草類(レタス、オクラ、コリアンダーなど)か牧牛を選択した農家がほとんどだ。各人の農地は大体3-4haだね。そんなに豊かではないが、どの農家にも車はあるし、まあ、静かな暮らしが続いているよ。」

関連資料によれば、農地解放前のガリレイア農場の面積は約500haだったが、それを140名ほどのモラドールに小分けして譲渡されている。すなわち、一人当たり最大で4haの農地を有する自作小農が多数生まれたのだが、この事実をアルナルドさんが再確認してくれたことになる。

成功事例かどうかの判断はさておき、ここが一つの農地改革の実例であり、かつて「第二のキューバ革命となる可能性が高い」と世界が注目した農民運動の拠点となったサトウキビ農場の今、である。

ペルナンブーコ州におけるサトウキビ栽培小史

非ドクマ的唯物史観でブラジル経済史を見事に解説した歴史学者カイオ・プラード・ジュニオールは、『現代ブラジルの形成』(1942年)において、「ブラジルには砂糖という天からの恵みがある」と記し、『大邸宅と奴隷小屋』(1933年)によってブラジル社会論を革新した社会人類学者ジルベルト・フレイレは、『砂糖』(1939年)において、「砂糖抜きでは、ノルデスチの人たちを理解することは出来ない」

と述べているが、そのサトウキビ生産の中心地だったのが、ノルデスチとりわけペルナンブーコであった。原生林に覆われたマサッペと呼ばれる肥沃な土壤に恵まれたノルデスチ沿岸地域で16世紀後半に開始された栽培は急拡大し、17世紀には世界最大の砂糖生産国となっている。1629年の段階でブラジル全土に346のエンジェーニョ(農場&製糖工場)があったが、150がペルナンブーコで、二番手のバイーアは80であった。ポルトガルによるノルデスチ再征服、オランダ敗退(1654年)に伴い、逃げ出した多くのユダヤ系農場主が



エンジェーニョ(砂糖農園)の元センザーラ(奴隷小屋)復元施設

カリブ諸島に移住し、製糖ノウハウを移転したことから、17世紀後半には、最大の砂糖生産地はカリブ諸島となっていくが、ノルデスチにおける黒人奴隷労働力に依存したサトウキビ生産は継続され、20世紀になってウジーナと呼ばれる近代的製糖工場になってもサトウキビのモノカルチャー構造は変わらなかった。

こうして400年以上に亘ってブラジル最大の砂糖生産地のポジションを維持し続けたペルナンブーコだったが、肥沃な土地も連作で長年に亘って痛め続ければ地力は低下するのは必定であり、サンパウロを主体とする南部、中西部でのサトウキビ栽培が本格化するに



つれ、激しく地盤沈下を始めることになる。

まずは、1970年代。第一次オイルショックを契機として、サトウキビからのアルコール(エタノール)を自動車燃料として実用しようとの「プロ・アルコール計画」が1975年に策定されたが、1980年代に入るとブラジルにおけるエタノール車の工業的生産が本格化する。これに並行してサンパウロにおけるサトウキビ栽培面積が急拡大し、ブラジル最大の生産地になっていき、1980年の州別順位は、①サンパウロ②アラゴアス③ペルナンブーコとなっていた。

という経緯を経た現在(2013年度)の州別サトウキビ生産量(単位:百万トン)をみると、①サンパウロ405②ミナス77③ゴイアス69④パラナ49⑤南マトグロソ41⑥アラゴアス24⑦マトグロソ19⑧ペルナンブーコ13、というように、ペルナンブーコ州はなんと8位まで後退している。アラゴアス州と合算しても南マトグロソに及ばないのが現状。ブラジル全体が、738百万トンなので、サンパウロ州だけで全体の50%以上を占めているのに比し、ノルデスチはセアラ州やバイーア州など

を合算しても60百万トン程度であり、全体の8%でしかない。これがかつて世界最大のサトウキビ栽培地であったノルデスチの現状である。

念のため、ペルナンブーコ州のここ40年ほどの生産量(単位:百万トン)推移をざっとみておくと、1974年13.3 2008年19.7 2012年17.4 2013年13.1となっており、製糖(&エタノール)工場の数でいくと、1974年38、2008年22、2012年20、2013年16、というように40年前の半分以下になっている。残念ながら、ノルデスチのサトウキビ産業が低迷から再成長軌道へ修正される可能性は極めて低いといわざるを得ない。

サンフランシスコ河中流域における灌漑農業の躍進

では、ノルデスチ経済全般がサトウキビと並行して低迷しているか、というと全くそうではない。ノルデスチ地域のマクロ経済(GDP)の成長率は、1995年から2009年までの15年間で53.4%となっており、これはブラジル全体の同期間の成長率を14%も上回っているのだ。すなわち、ノルデスチ経済がかつてのようなサトウキビ産業モノカルチャー依存体質から脱皮し、二次産業、三次産業の比重が高まって、既に多角化している、ということだが、農業部門でいえば、こうしたノルデスチ経済多角化の象徴といえるのが、セラード北部(バイーア州西部、マラニャン州南部、ピアウイ州南部)における新穀倉地帯の確立と、ペトロリーナとジュアゼイロという双子都市に代表されるサンフランシスコ河中流域における灌漑果樹農業の躍進である。

サンフランシスコ河流域の開発を目的として1948年設置されたのが、CVSF(サンフランシスコ河流域開発委員会)であったが、これが1967年SUVALE(サンフランシスコ河流域開発庁)へ改組され、さらに1974年にCODEVASF(サンフランシスコ河流域開発公社)となって、灌漑農業プロジェクトを推進・具体化するようになる。



灌漑ブドウ畑



灌漑マンゴ畑

1968年に設立されたベドドゥロ・プロジェクト(総面積7,797ha、灌漑可能面積2,418ha)を嚆矢とするが、サンフランシスコ河中流域における灌漑農業が本格化するのには、1978年にラテンアメリカ最大の人造湖ソブラディーニョ・ダムが竣工し、さらに、最大規模のニーロコエリョ・プロジェクトが1984年に設立されてから、といつてよい。

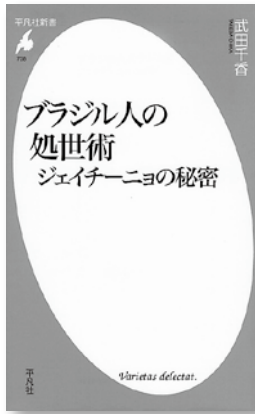
1991年の段階で、全てのプロジェクトを合算すると、灌漑可能面積43,000haとなっていたが、二大主要作物マンゴとブドウの収穫量推移をみてみると、1991年8千ト

ンだったマンゴは、2013年には45万トンへ、同じく、1991年3万2千トンだったブドウ生産量は2013年には25万トンへ、と、急成長しており、また糖度の差別化により欧米市場での評価も高いことから、ブラジル輸出量全体の9割以上が同地域から出荷されている。また、農産加工分野の一例をあげれば、ワイナリーが7か所稼働中である。

強制剪定、塩害防止暗渠排水路、開花時期調整ノウハウなどの農業技術は現地にて試行錯誤の上開発されたものだが、80年代以降南部から移入した日系農家(日系文化協会ACENIBRAの設立は1984年)も、この熱帯乾燥地における灌漑農業確立に多大な貢献をしてきている。

多くの自作農が創出され、大農型プランテーション栽培と自作小農が共存する農業構造となったサンフランシスコ河中流域における灌漑農業フロンティアは、様々な問題を抱えつつも、農民層の分解・辺境化を“民主的に防止”できた農業開発成功例として評価してよい、と筆者は考えている。

(きしわだ ひとし 前ニチレイブラジル農産(有)監査役、日本ブラジル中央協会理事)



『ブラジル人の処世術 - ジェイチャーニョの秘密』

武田 千香 平凡社 (新書) 2014年6月 211頁 760円+税

jeito (方法、手段、便宜) の縮小形 jeitinho は簡単にいえば決められたルールに触れても要領よく臨機応変に対応してちゃっかりと目的を達することを指す。日本人の多くがもつ順法精神や几帳面さからみればブラジル人はずいとか規則にルーズと見えることも少なくないが、ジェイチャーニョこそブラジルらしさであり、ブラジルで生活していくために欠かせない流儀で、いわばブラジル人のアイデンティティにもなっているという。

社会の「規律・秩序」と個人をまず考えその「都合・必要性」との間のグレーゾーンとして、社会認知されているこのジェイチャーニョの事例や小説での取り上げ方、パウリスタ (サンパウロっ子) とカリオカ (リオデジャネイロっ子) の感覚の比較、それらの背景にある歴史構造、ブラジル文化の根底を流れるサッカー、カポエイラ、サンバ、ボサノバでのリズムのずらし効果など、多面的に論じていて、ブラジル人、ブラジル社会を本当に理解する上で面白い解説書。 (桜井 敏浩)



『イッペーの花 - 小説・ブラジル日本移民の「勝ち組」事件』

紺谷 充彦 無明舎出版 2014年7月 230頁 1,700円+税

太平洋戦争直後のブラジルで、ブラジル政府の規制の中で本国との情報を遮断された日系人社会で、敗戦を連合国の謀略だと負けたことを信じたくない人達の「勝ち組」による敗戦を認識した「負け組」の人達へのテロ、「勝ち組」の素朴な移民たちの帰国願望や皇室への畏敬の念につけ込んだ偽宮様への寄進や日本からの迎いの船で帰るための船賃などの口実で金品を巻き上げる詐欺師たちが横行した。

現代の日本でその日暮ら的に墮情な生活をする主人公に、ブラジル移住から戻った祖母の遺品の手紙の束と2万円が渡され、自分の血筋にも関係がありそうだとブラジルへ渡った主人公は手紙の差出人を探し老人ホームで祖母と親しかった老人に会い、彼が「勝ち組」のテロに荷担し偽宮様に欺され自分の農場を売ってその信奉者の農場運営に努め、許嫁と内心思っていた祖母を奪われた過去を知る。

実際の当時の日本人同士の凄惨な抗争と詐欺事件を題材に小説化したもので、著者はブラジルに渡りサンパウロで邦字紙の記者を務め帰国した。 (桜井 敏浩)



『音楽でたどるブラジル』

Willie Whopper 彩流社 2014年5月 87頁 1,900円+税

ブラジルにはサンバ、ボサノヴァだけでなく多くの「ご当地ソング」がある。ブラジルの北から南の7州21曲を選んで、曲の紹介やエピソード、ゆかりの場所とそこでの名所、名物料理など、その歌が収録されているCDとともに紹介している。沢山のカラー写真とそれぞれの町での歌の解説を通じて、楽しくブラジルを理解する一助になる。 (桜井 敏浩)